

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー — 試行錯誤 —
No. 29



タイ農村で診察するタイ人医師、JVCは注文に応じX線写真を撮る (撮影 下園宏司)

X線移動診療活動

1982年11月13日、JVC医療チーム第1陣が成田を飛びたった。タイ・カンボジア国境でのレントゲン診療を行うため、ボランティア医師2名とレントゲン技士1名がタイの首都バンコクへと向かった。

●「緊急事態」への適応を目指して

一見して平和的に見えるカンボジアの難民村も、常に戦闘・砲撃の脅威にさらされている。例年乾期(10月～3月)になると、砲撃を受けて消失する難民村がある。村を失った難民達は、再び着のみ着のままで戦火を逃れ、タイ側へと流入してくる。多くの人々が銃や砲弾やその破片によって傷つき、また異常事態に直面して陣痛の始まる妊婦も少くない。

この様な、人間の生存にとって不可欠のものが欠けており、それを補う外部からの援助が迅速かつ有

— JVC医療プロジェクト —

効に保障されることが必要とされている瞬間、を「緊急事態」と呼ぶ。

今年'83年1月末にも、ヘンサムリン軍の攻撃により焼失したノンチャン難民村から約15,000人のカンボジア難民がタイ側へ流れ込んだ。この時も国連機関や様々な民間団体が緊急救援に駆けつけ、食糧・水の供給、炊き出し、仮り住まい用ビニールシートの供給、医糧チームによる応急手当てとケガ人の病院への移送などの援助が行われた。

Trial & Error No. 29 目次

少女との出会い	百村 清 3p.
難民キャンプの病棟で見たもの	柴田久史 4p.
アフガニスタンのフランス人医師たち	野中章弘 7p.
JVC・決算報告と予算	10p. / 声 12p.

「JVC医療チーム」も「緊急救援」に参加した。当時派遣されていたメンバーには、外科一名、産婦人科医一名、パラメディカル専門家(看護師)一名がおり、それぞれの医師が応急手当て、出産の介助などの処置を、心身共に傷ついた難民達にほどこした。

●なぜ民間の医療チームが有効なのか

約3年間、カンボジア難民診療に従事していた日本政府派遣医療団(JMT:Japan Medical Team)も昨年'82年末をもって難民救援医療から手を引いていた。この間、JMTに派遣された日本人医師・看護婦の人々が救ってきた人命は数えきれず、その功績は高く評価されるべきであろう。しかし、JMTは政府派遣という形ゆえの限界や弊害をもっていた。

この点について諸外国のNGO(Non-Governmental Organization:民間団体)の医療チームと比較してみたい。その主な相違としては、日本政府の指示を持たなければ動けないため、現地のニーズに迅速に対応しづらい、ということがあげられよう。

また派遣メンバーの安全と保障の問題を重視するあまり、危険の伴う国境の難民村での診療行為ができなかった。'80年3月に国境付近で戦闘が起きた際には、各国のNGOが国連機関の指示の下に協調して救援活動を続けたにも関わらず、JMTは日本政府独自の判断によって患者を病棟に残したまま、サケオキャンプから一時撤退せざるを得なかったのである。さらに政府派遣では外交上の制約も受ける。

このような政府チームの限界性を克服するためには諸外国にみるような民間医療チームが必要である。JMTの活動終了時でも、タイ国内には約30万人のカンボジア難民が滞在しており、援助の手を必要としている。これ等の事を考慮し、JVC独自の民間医療チームを派遣するに至った。

●JVCの医療チーム設立のきっかけ

JVCでは発足当初から難民や被災民の「緊急救援」に参画する際には、「医療チーム」が必要であるという認識に立ち、その発足のために様々な試みをしてきた。しかし、活動終了後の再就職が難しい上に、長期休暇の一般化していない日本社会の中でも特に医療界は複雑であり、数々の困難さから医師等の継続的派遣の可能性が見出せずにいた。今回その派遣が実現した最大の要因は、実際医療に携わっている医師自らの積極的で献身的な努力であった。

その後約6ヶ月間日本国内ではプロジェクト実施

に必要とされる資金の確保・募金活動、プロジェクト継続を最低一年間可能とするための医師確保、広報活動。タイの現地サイドでは国連管轄機関(WFP/UNBRO)やタイ政府とのプロジェクト実施許可取得や予算獲得交渉、医師受け入れ体制の整備などを経て、11月プロジェクト発足となった。

このチームは初めての試みということもあり、派遣に無理がかからない様注意を払い、「カンボジア難民村及びタイ被災村でのレントゲン移動診療により諸外国の民間医療チームの診療活動の充実に貢献する」という活動範囲に留めた。

●JVC医療チームの課題と展開

発足後7ヶ月間活動を続けてきたJVCの医療チームのこれまでの活動を見直し、今後の方針を打ち出そうと今年7月16日東京にて会合をもった。出席者は、それまで現地に飛んだ医師、調整員(コーディネーター)、参加希望医師、JVCオフィススタッフ、オブザーバー数名であった。

この会合では事実経過の再確認の後、個々人の現場体験を通して様々な角度から今後のチームのあり方が検討された。特に強調されたのは、このプロジェクトが発足時に無理がかからない様配慮した結果の限定的なものであり、今後地域的にも内容的にも広げて行くことと、その実現のために必要な医療人の輪をつくることであった。具体的な案としては、永続的な地域診療活動、難民を対象とした眼科診療、諸外国NGOへの医師派遣とトレーニング、活動を支えるための医療財団の設立などが出され、その内いくつかは実現に向け既に動き出している。

その他注目すべき動きとしては、「若手医師による定期的学習会」があげられよう。国内でも徐々にではあるが医療関係者の間に輪が広がり、現在週一回、医師・看護婦・助産婦・臨床検査技師その他十数名が集まり、海外で実働する民間医療チームに必要とされる技術的側面、社会的基盤などの学習討論会をもっている。同時にニュースレターを発行してより一層輪を広げようとしている。

フランスのMSF(国境なき医療団)などの様に緊急事態に即応でき、国際的に適用する日本の民間の医療団が育つまでにはまだまだ永い年月がかかるであろう。しかし世界各地で戦乱や災害は断えず、このような医療活動は切実に必要とされている。目標に向かって一つ一つ着実に積み上げてゆきたい。

少女との出会い

百村 清

一人の女の子が、じっと私達の方を見詰めている。バンサンゲという難民キャンプの病院の一隅で、X線写真の乾燥を待つ間、X線技師や、コーディネーターと雑談している時の事だ。

ちらっと目を向けると、何か悪い話でも聞いてしまったのか、という風に、申しわけなさそうな顔をして目を伏せた。少女の細い茶色がかかった髪は埃をかぶって鳥の巣の様だ。細い手足も垢と埃の皮膜を張り付けた様でつやがなく薄汚い。着ているシャツも繰り返しの洗濯に耐えられなくなったもので、薄黒く所々ほころびたままだ。

私達 X-ray チームが訪れているどこのキャンプへ行っても、その装置や撮影風景が物珍らしいのか、毎日の時間のつぶし様がないだけなのか、10数人から多い時は30人からの人達が周りに集まって来るのだがこの少女の表情は何故か一瞬にして私の心を捕えた。

腕にビニール袋に包んだ何かをかかえている。見せてくれないか、と目で問いながら手を伸ばすと困った様な表情でためらいながらも手わたしてくれる。袋から出すと、三冊のノートだ。国連から配られたノートらしく、表紙の下隅に WFP/UNBRO の文字が見える。めくってみると、勿論私にはクメール語の文字は読めないが算数らしい図式や、別の所には英単語が書き連ねてある。

このバンサンゲの様に、比較的安定したキャンプでは学校も開かれている。私達が受け持つ4ヶ所のキャンプの内、ノンサメットにもあると聞いた。

その他のレッドヒル（5月24日より、2300人と16000人の二つに別れて、新たなキャンプへ移動）とか、プレイチャン（6月までにこの3ヶ月で4回目の移動を行う予定）のキャンプでは、とても学校など開ける状態ではない。

それでも、このバンサンゲの病院で働く、クメール人のメディカルアシスタントから、5月1日から25日までの間に6人の子供が死んでいったという話を聞いた。ちなみに、バンサンゲのキャンプの人口は27000人である。

国境で働く、各医療チームからの報告でも、栄養

失調、結核、肺炎、マラリヤ、高度の貧血等の病名が多くみられる。

特に栄養失調の子供が、下痢と脱水で次々と死んでゆくという報告は悲惨なものだ。

水不足、10年振りという今年の暑さ、埃、ハエによる皮膚病、結膜炎の報告も多い。

眼科医という事で、時に診察を頼まれた患者にもビタミンAの欠乏からと思われる小児の角膜軟化症、不潔や抵抗力の低下も関係すると思われる角膜潰瘍の例が多い。半数は完全に視力を取り戻すのはむずかしいと思われる症例だ。

今年3月終りの戦闘の時期には、外傷の報告が目立っていたが、その後各キャンプが安定すると、再び以前と同様の疾病がキャンプの人達をさいなむ。

少女の肌に健康と清潔の証である皮膚のはりやつやがないのは、1人1日15ℓと決められている水の少さや、燃料費、油等の調味料も含め1日90円と決められている栄養価の低い食事の為だろうか。年令を聞くと10才とのこと。この数年、空腹をかかえ逃げ、隠れ、おびえてきた毎日が、少女の表情に大人と同じかげのような烙印を押ししてしまったのだろうか。ここの子供達は、大人の理想主義から少し離れた所で成長していった様だ。

この1ヶ月半キャンプ内の状態には、時に生理的嫌悪さえ感じる事があった。

しかし、少女のノートは、私に、今何がその人達の為になるのか、これから何をやらねばいけないのかという事を、少し具体的に教えてくれた様だ。

私は7月初旬に帰国するが、もう少し大きな何かを持って、再びこの少女に会いたいと思っている。

1983年5月26日 アランヤプラテートの宿舎にて

*百村医師は

83年4月上旬より6月末までのJVCのX線チームに参加



JVC X線チームの撮影風景、レッドヒル難民村にて

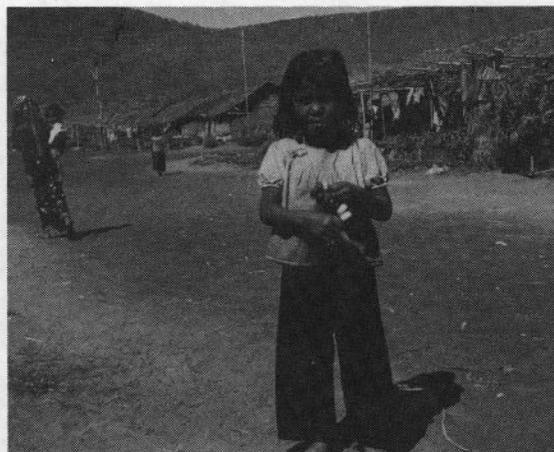
“他人の小さな戦争——！”

難民キャンプの病棟で見たもの

柴田久史

「アンプタ（切断）だ。」ドクターが叫ぶ。たった今ICRC（国際赤十字）の救急車で一人のカンボジア男性が、私達の病棟に運ばれてきた。彼は国境の林の中を歩いていて地雷を踏み、足首より下を吹き飛ばされたのだ。すねから下は包帯でまかされているが、にじんできた血で真赤だ。顔は恐怖に震え、唇は真青、歯はがちがちになっている。大至急手術の準備がされ、手術室へ担架で運び込まれる。約一時間手術の後、彼の足は切断された。

また一人、地雷で片足を失った。JMT（日本政府派遣医療団）の病棟は60床あるが、入院患者のうち6割から7割は同様に地雷を踏んで片足を、時には両足、あるいは片手を失った人達だ。中には幼ない子供や婦人もいる。地雷を踏んでからここへ運ばれるまでに6時間、7時間、時には12時間もたっている。足は熱をおびてとても熱い。すでに細菌の感染が始まっている。そのため傷口がうまくくっつかずなかなか癒えたりする。そして再切断。彼らは2、3ヶ月入院し、傷口がしっかりふさがるとリハビリテーションセンターで義足が作られる。さらに2、3ヶ月の義足での歩行訓練の後、彼らは再び国境の難民村へと帰って行く。



カオイダン難民キャンプ

昨年の6月、医療チームの調整員として派遣された。これはそのとき私が見た日常の一コマだ。一体、これが現実なのだろうか。たった一週間ほど前まで、私は日本にいて毎日友人とおしゃべりを楽しんでいた。私の友人も今この瞬間、日本で誰か別の友人と楽しく語り合っているに違いない。平和に慣れている日本と全く同じ時間に、飛行機でたった8時間ほど飛んだ、このタイ・カンボジア国境では上記のような人々がいる。赴任した当時、私はこの二つの世界が同時に存在することが信じられなかった。が、これも時が経つにつれて慣れていった。その自分に私は別の恐怖を感じた。

ある日、体の衰弱しきった妊婦が運ばれてきた。陣痛も始まったが、このままでは母親も生まれてくる子供の命も危いという。手術室で出産が始まる。彼女の夫は祈るように竹のイスに座って待っている。彼女は23才、私と同じ歳だ。なんとか、二人とも助かってくれ……。長い時間がたった気がする。やがて出産。元気な赤ちゃんが生まれた。

看護婦があわてて手術室から飛び出してきた。「母親が危い。」弱った体の上の出産で彼女は昏睡状態になっていた。酸素吸入が続けられる。一日、二日と病棟へいくとまず最初に彼女の様子を見る。ドクターに恐る恐る尋ねた。

「助かりますか。」

「うーむ、もう脳死している。空気を送りさえすれば植物人間として心臓だけは動いているが……。」

そして数日、酸素吸入が続けられた。

病棟を管理しているコーディネーター（調整員）がやってきてこう告げた。

「彼女はもう脳死している。限られたドクターと看護婦の数で大勢の患者をみなければならない状況下では、彼女に力を注ぐよりは他に苦しんでいる患者に全力を注いで下さい。」

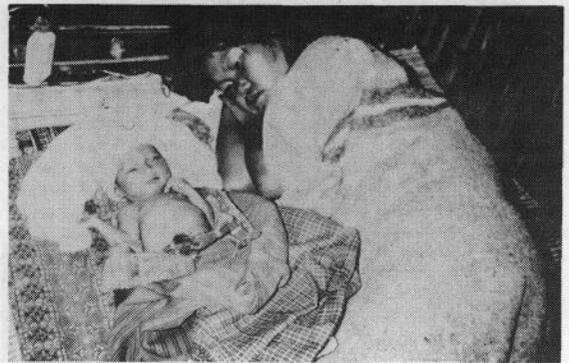
私達は空気を送るのを、やめた。私は、死んだ妻

にとりすがって泣く夫の姿を直視できなかった。子供の命と引き換えに死んでいった彼女。私と同じ年で生涯を終えた彼女に、私はただ、全身から力が抜けていくのを感じるだけだった。

ある日、国境から一人のおばあさんが運ばれてきた。病名は覚えていないが重いものではなかったように記憶している。入院して2日目で彼女の姿が見えなくなった。ヘルパー（カンボジア人の助手）が騒ぐ。「逃亡した！」国境からやってくる患者はタイ軍によって厳しくチェックされている。国境の患者は必ず国境に帰らなければならない。タイ政府の方針により、国境にいる人々は新たにキャンプに入ることができないのだ。

おばあさんが見つかった。カオイダンキャンプ内の親戚の家にいたのだ。彼女の病状はすでに回復していて、ドクターの退院OKの許可もおりていた。軍の規則によって彼女は逃亡の危険ありとみなされ、即退院となった。彼女は荷物を整理し、病棟の外に待っている国境行きのトラックに向かって歩き出した。ちょうどその時、彼女の孫の若い女性が心配してやって来た。彼女はおばあさんが退院すると知って大声で泣き出した。

「絶対行かせない。国境へ帰ったらまた戦闘に巻き込まれてどんな目にあうかわからない。いやだ。」おばあさんはうつむいたまま何も言わない。周りをカンボジア人が取り囲む。彼女は涙をいっぱい浮かべてあたりを見回し、私に視点を定めた。何も言わないが彼女は知っている。私だけがおばあさんをここへ留める事ができることを。彼らは同じ家族でありながら国境とカオイダンに別々になっているために一諸に住むことが許されていないのだ。しまった、と思う。この状況を私が早く知っていればドクターの退院許可を止めることもできたのに。いたたまれない後悔で全身かきむしられる思いだった。何とかできないものかと、ICRCの輸送担当者におばあさんをもうしばらく滞在させてもらえるよう交渉した。答は、「ノー。」タイ軍の規則を離れて考えてみても私達は他に大勢の患者を抱えている。異状のない者を滞めておく事はできない。結局、彼女は孫娘と引きさかれるようにして国境へ連れ返された。泣き叫びながらおばあさんを見送った娘の後ろ姿が今も私の脳裏に焼きついて離れない。



生れたばかりの赤ん坊とその母親

11月初旬、私が病棟を見回っていると、1才位の男児を連れた婦人がベッドに座って泣いていた。彼女は、数日前に熱湯を浴びやけどのために、手の平が閉じたままの子供の手術のためにここへやって来た。私は通訳を伴い、彼女のもとへ行き理由を尋ねた。

「私にはこの子の他に国境に残した3才と7才の子供がいます。主人は死んでしまい、他に親戚もいないので隣人に預けてきましたが、心配でたまりません。もしベトナム軍が来て戦闘が始まればあの子ども達は死んでしまいます。」

軍による規則で、一家そろってカオイダンにやって来ることは逃亡の恐れありとみなされ禁止されている。国境に残された子供達は逃亡を防ぐための言わば人質だ。ただあまりに彼らは幼い。なんとか連れてはこれられないものか。私は再びICRCの輸送担当者に向けあった。答えはノーだった。私は重い足どりで彼女のもとへ行き、言った。

「あなたには2つの選択しかない。このままここへ留まって手術を待つか、手術をあきらめて国境へすぐに帰るかのどちらかです。」

彼女は沈黙した。そしてみるみるうちに大粒の涙があふれてきた。

「この子の手は閉じたまま開かない。手術はして欲しいし、残してきた子供達も心配でたまらない。私には決められない。」

そして大粒の涙。

しまった。

母親をして当然そういう言葉が返ってくるのはわかっていたいかなければならなかった。私が彼女の立場でも決められないだろう。もっと言い方があったはずだったのに。私は全身汗びっしょりだった。そして言いようのない罪悪感にとらわれた。



カオイダン難民キャンプの病院にて

ドクター、看護婦と私で慎重に討議した。子供の手は開かないといっても死ぬような緊急のケースではない。親指は動くしものはつかめる。今すぐ手術しても、手の開閉の訓練をしなければならぬ。そのためには最低一ヶ月は病棟に滞在しなければならぬ。国境が緊張状態にあり、残された子供の命が心配だ。以上のことを考慮し、手術をせずに彼女は子供とともに国境へ今すぐ返した方がいい、と結論された。再び重い足どりで彼女のもとへ行き、状況を説明し、はっきりと言った。

「私達は、あなたの子供の手術はできません。すぐに国境へ帰って下さい。」

私は再び彼女が大粒の涙を流すものと観念したが全く以外だった。彼女は「ふー。」と大きなため息をつけて笑顔でこう答えた。「私は日本の先生が好きです。半年位したらまた来ます。」

私は返す言葉がなかった。

彼女のため息はなんだったんだろうか？ 彼女自身迷っていたのがふっ切れたからか。「私はこれくらいの辛い事にはもう慣れてますから大丈夫ですよ。」という諦め切ったため息だったのだろうか。

またしても難民であるがゆえに当然あるべきはずの人権が認められなかった。あの子の手はJMTが引きあげた今となってはおそらく一生閉じたままだろう。

現在、緊急性がなくなってきたという理由でインドシナ難民への関心が薄れている。果たしてこれでいいのだろうか。1979, 80年当時、新聞、テレビを通じて大々的に報道された時にだけ目を向け、マスコミが静かになるとともに忘れてしまう。最近のベトナムの攻勢とともに再び罪のない人々が死の恐怖にさらされ、国境に無数に埋められた地雷で傷つき未だにマラリヤなどの病気に苦しめられている。そして何より、人間としての基本的人権が、彼らには認められていない。私自身、「難民」の存在自体に、慣れてしまっているのではないかと恐れている。

ある人からこんな話を聞いた。某会社の入社試験の際、戦争について尋ねられたので、戦争は絶対反対ですと答えると、面接官は、戦争はよくないが、小さな戦争は少々ならかまわない、それによって科学や技術は進歩してきたのだ、と言ったという。

果してこれは、ごく特殊な人の発言だろうか。日本自体平和に慣れてそんな風潮にあるのではないだろうか。「他人の戦争はかまわないが、自分が巻き込まれるのは困る」という意味ではないだろうか。カンボジア問題を含めて「難民」の存在は私達にとって決して遠い異国の、無関係な出来事ではない。彼らの存在を、苦しみや悲しみを忘れた時には、今度は、日本が「小さな戦争」に巻き込まれるのではないか、その時になって難民を語ってももう遅い。難民を語るのは今しかない。

しばた ひさし；1982年6月～12月まで、日本政府派遣医療団のコーディネーターを務めた。現在JVCの農業プロジェクトのコーディネーターとして、東アフリカのソマリア在住。

*文中の写真は、内容と直接関係ありません。

訂 正

Trial & Error 29号 2p.の左上から22行目、「80年3月に……」とあるのは、80年2月、また25行目の「サケオキャンプから……」とあるのは、カオイダンキャンプからの誤りです。訂正してお詫びさせていただきます。

そこに自分を必要とする人々がいるなら

—アフガニスタンのフランス人医師たち—

写真と文 野中章弘

ヒンズークシ山脈の峻険にまだ深い雪が残る三月中旬、アフガニスタンの首都カブールの特別法廷は一人の若いフランス人医師に懲役八年の判決を下した。

フィリップ・オーゴイヤー^{注①} (29歳) というこの小児科医は、民間救援組織 AMI (国際医療援助会) のメンバーとしてロガール州のゲリラ解放区で活動していたが、運悪くソ連軍に内通する密告者によってソ連軍空挺部隊に捕えられ、「スパイ罪」「不法入国」「反革命勢力への支援」などの容疑で起訴されていた。

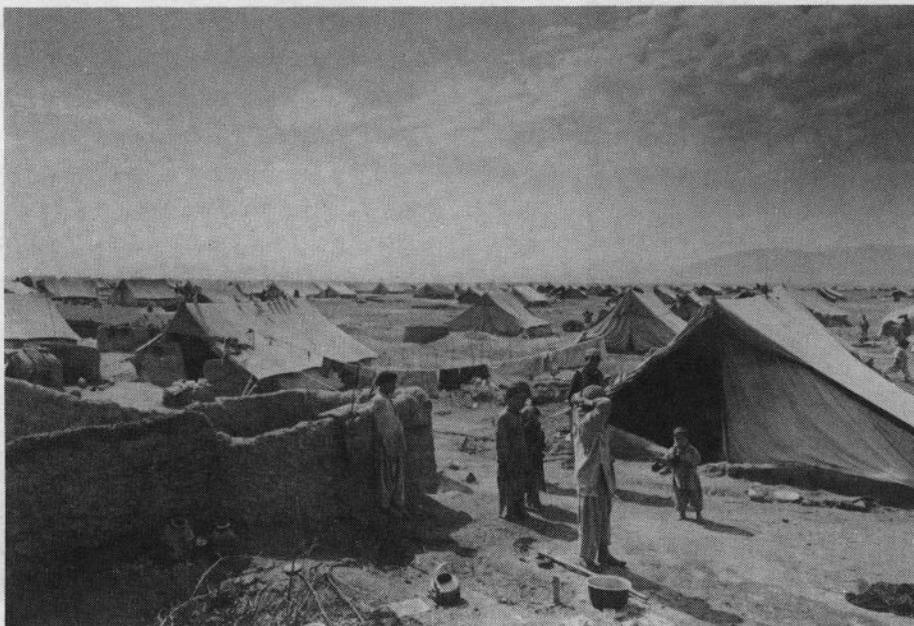
この裁判はアフガニスタンの解放区に潜入して活動するフランス人医師達へのみせしめであった。

79年12月のソ連軍侵攻以来、3つの救援組織 (MSF, MDM, AMI)^{注②} がこれまでにのべ二百人以上の医師と看護婦を解放区に送り込み、常時15~20

名の医師が住民やゲリラ達の医療活動に携わってきた。これらの組織はいずれもパリを拠点とするフランスの団体で、ICRC (国際赤十字委員会) を含めフランス以外の救援団体はアフガニスタン国内では活動していない。

私が解放区で会ったAMIの医師は、「他の国のボランティア組織が何故来ないのかは知らないが、私達にとってはアフガニスタンだけが特別というわけではない。AMIみたいにちっぽけな組織でも、コロンビア、イラン、ラオスなど世界のいたる所に医師を派遣している。要請がある限り、どこへでも行くつもりだよ。」と言う。

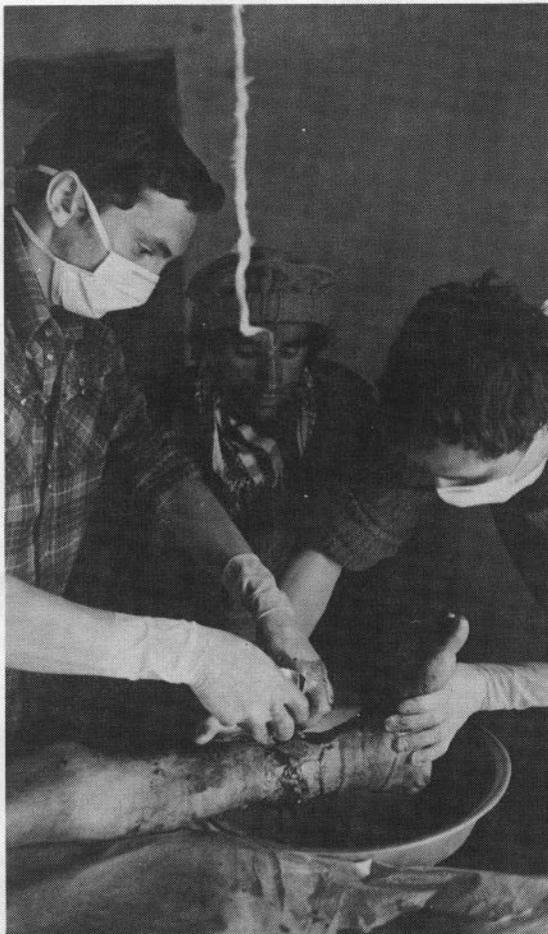
AMIの場合、フランスからの飛行機代も含めて全て自己負担、無料奉仕である。数百キロの薬も自分達でフランスから運び込んだ。日本の医者と違い生活も質素で、パキスタンでも12ルピー (約240円)



アフガニスタン難民
現在、パキスタンに約270万、イランに約160万人。国民の約4分の1の人々が難民となって祖国を脱出したことになる。

のヒッピー宿に泊っていた。

医師達はヒゲをのびし、アフガンの部族服で変装した上で、パキスタンからゲリラと共に密かに国境を越えてそれぞれの解放区へ向う。石ころだらけの岩山や険しい山岳地帯を幾日も歩く。ソ連軍の基地の近くや幹線道路を横切る時は、ソ連軍のパトロールや武装ヘリコプターの攻撃を避けるため、夜間の行軍となり、しばしば夜を徹して歩かねばならない。山歩きに慣れたゲリラ達とは違って外国人にはこの行軍は本当に辛い。解放区からパキスタンへの帰還の10日間、私はたまたまフランス人医師2人と英、仏のジャーナリスト3人に同行したが、我々“外人部隊”はゲリラ達の歩く速度についていけず、医師達は病気になるしイギリスの記者は足を痛めて泣きながら歩くという“悲惨な”有様だった。フランスのカメラマンは体重が14キロ減り、私より1ヶ月遅れて解放区入りした日本人のライターはパキスタンに戻るとすぐに入院してしまった。食事はナン（小



治療するAMIの医師、地雷による負傷が多い

麦粉で焼いたパン）とチャイ（砂糖入りのお茶）という粗末なものだし、戦場の緊張感で神経も弱る。解放区がパキスタン国境から遠い場合はこのような行軍に数十日間も耐えねばならず、相当な気力と体力が必要だ。

AMIのコーディネーターはアフガニスタンでの活動が最も危険だという。ソ連・カルマル政権軍は全土に密告網を張りめぐらせており、解放区の寒村でソ連軍の攻撃を受けた場合、地理に不案内な外国人は逃げきれぬものではない。また、ミグ戦闘爆撃機や武装ヘリコプターの攻撃は病院も民家もみさかいが無い。屋根にペンキで赤十字のマークをつけた病院も容赦なく破壊される。

解放区での患者の90%は非戦闘員で、残り10%がゲリラ達である。容易に子供達の生命を奪うはしかや百日ぜき、それに結核、マラリア、回虫なども多い。

私が訪れたカブール北方約百キロのパンシエール溪谷の病院では民家を改造して病室に使っていたが毎日4、50人の患者が来る。医薬品はすぐ不足するが、パキスタンまで10日かかるため補給もままならない。また女性の医師も必要とされている。イスラムの戒律が厳しいため、男の医師は女性の患者を診ることができず、人を介して病状を聞き、薬を与えるだけである。入院患者は14人いたが、そのほとんどが地雷で足を切断したゲリラ達であった。ソ連軍の地雷による負傷の手術は1ヶ月20件にもぼる。パンシエールは約8万人の人口を擁する長さ約百キロの溪谷だが、病院は一つしかないため、人々は何時間、あるいは何日も歩いてこの病院にやってくる。ここだけでもフランス人医師達によって生命を救われた人々の数は恐らく数百を下るまい。

しかし、このようなフランス人医師達の献身的な働きもソ連軍から見れば明らかな利敵行為に映る。実際、住民だけでなくゲリラ達（もっとも、解放区では住民とゲリラとの区別は不可能である。女は生産活動などで男達を支えているし、緊急時には10歳前後の子供ですら銃をとる。）も治療を受けるため、前線の野戦病院的機能を果していることも事実だ。これはアフガニスタンの解放区に限らず、タイ・カンボジア国境のゲリラ支配下の村の医療行為も同じで、ベトナム軍からすれば「反革命的行為」として非難の対象となる。難民救援ですら、難民の発生が政治的要因による場合は、いくら人道主義を掲げるボランティア団体であろうとも程度の差はあれ、何



大皿に盛った飯を手で口に運ぶ(パンシエール峡谷の民家を改造した病院にて)

らかな政治色を帯びる。“中立性”などは幻想ではない。ただ、アフガニスタンで活動するフランスの組織がきわだっているのは、ソ連からいくらか非難されようと、実際に捕えられ投獄されようと少しもゆるまずに彼らの原則を貫いていることだ。

あるMSFの医師は「アフガニスタンでは私達はCIA(米国中央情報局)のエージェントだと言われホンジュラスやエルサルバドルではKGB(ソ連国家保安委員会)のエージェントだと非難されている。しかし、私達自身は全体主義には反対するが、別に右翼でも左翼でもない。」と言う。唯一の問題は、人々が彼らを必要としているかどうかであって、要請がある限り彼らはどこにでも行く用意があるのだ。その姿勢が徹底している。それがいい。

ジョセフ(31歳)は、行軍の途中で病気になり吐きながら歩いていた医師だが、こんな危険な所に何故来たのかという私の問いに、「オレはたまたま3ヶ月休暇がとれてね、アフガニスタンに特に興味があるわけではないんだが、こんな冒険的なことが好きなんだよ。」と、あたかもバカンスにでも来たかのように答えた。

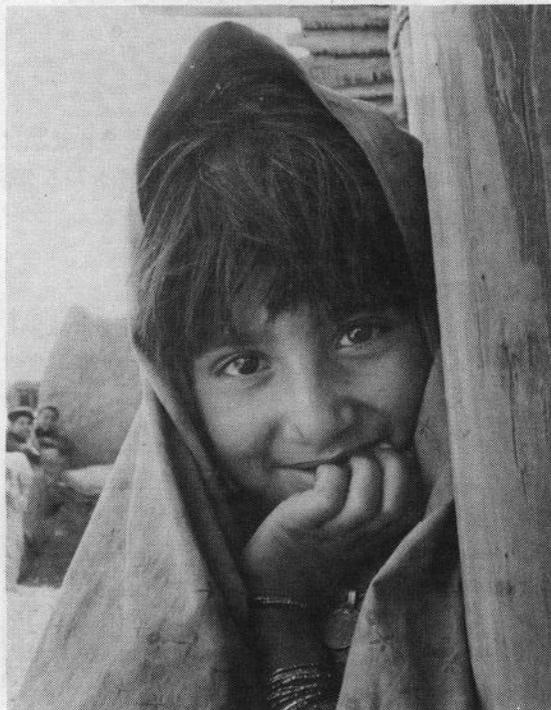
ボランティアは好きだからこそできるのであって(他者を助けることによって得られる自己満足、充足感も含めて)、“人道主義”という建前だけで人は動くのではない。そうであるなら、バカンスに行くようにボランティアに来て何の不思議もないのである。(むろん、自分の行為に責任を持たないような人間はボランティアではなくバカンスに行くべきである。)

注①この判決後フランスでは、オーゴイヤー医師の釈放運動が起こり、フランス政府も激しく抗議したことから、6月に釈放された。

注②MSF(Médecins sans Frontières) = 「国境なき医療団」

MDM(Médecins du Monde = Doctors of the World)

AMI(Aide Médicale Internationale)



JVC・'82年度決算報告と'83年度予算

JVCは、1980年2月の設立以来、日本の民間の人々の心と浄財を結集し、インドシナ難民救援に力を注いで参りました。タイ国内はもとより、シンガポールやカンボジア国内においても独自の活動を展開すると同時に、難民だけでなく、難民の流入によって生活を圧迫されたタイの農村、更にはこれらの人々と同様に恵まれない境遇にあるスラムの住民に対しての継続的な援助も行っております。

難民問題が第三世界を中心にして世界各地で発生している現状のもと、JVCは1983年以降インドシナ以外の地域、アフリカ（ソマリア）や中東（レバノン）などにも活動を広げて行く予定です。

ここに支援者・支援団体の方々へ1982年度決算と1983年の予算の概略を報告するとともに、今後のご支援をお願いする次第です。

●1982年度寄付金収入総額

1982年度の寄付金総額は85,053,232円でした。そのうち、主に日本の民間団体からの援助額は約60%、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）などの国連機関からは27%、残りの約13%は日本国内の個人の方々からの寄付によりました。

●1982年度支出総額

支出は事業費と管理費とに大別され、支出総額は90,191,355円でした。そのうち、事業費は72.5%、管理費は27.5%でした。

●事業費の使途

1982年度の事業費支出は前年度の76%に減少しましたが、その理由として以下のことが挙げられます。

①タイ国内におけるインドシナ難民問題の終息化にともなう、タイ政府による難民キャンプの統廃合政策が進み、JVCの活動地であったノンカイ、ソンクラ、ウボンの各キャンプが閉鎖されたので、これらキャンプでの活動を終了した。

②1981年度のバンビナイ・キャンプにおける下水道工事のような、多額の資金を要するプロジェクトが実施されなかった。

事業費の使途はグラフIとIIをご覧ください。

●管理費の使途

事業費支出の減少にもかかわらず管理費支出が増大しましたが、その理由として以下のことが挙げられます。

①新プロジェクト開設にともなう事務経費の増加。

②難民問題の長期化と活動内容の専門化に即応するために長期活動ボランティアを増やした結果人件費が増加した。

③タイ国以外の地域で新プロジェクト開設する準備として、調査、渉外、広報などを行った。

④JVC本部をバンコクから東京に移す関係上、従事するボランティアを増やした結果、諸物価の高い東京で支出の増大を余儀なくされた。

⑤1982年9月1日、国内に運動の輪を広げてゆく一環として、京都に連絡事務所を開設。

尚、上記のような実状にもかかわらず、管理費を充足するのは非常に困難な状況にあります。1983年度はもとより、事務運営費を何らかの形で恒久的に生み出すことが当面の大きな課題となっています。

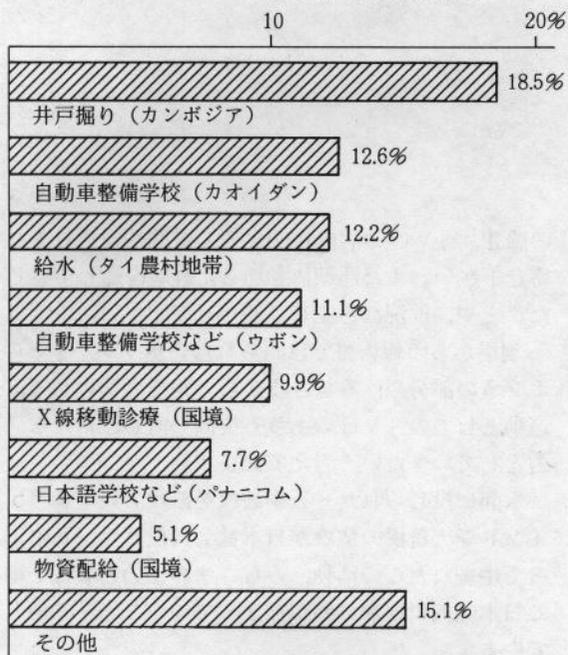
① 1982年度新設プロジェクト

地 域	内 容	開始日
東北タイ・北タイ クロントイ・スラム (バンコク)	農村開発プロジェクト	1982年10月
	電気工研修所	1983年1月
タイ・カンボジア 国境	X線移動診療	1983年1月
	補助食供給	1983年2月
奈良 県	御所日本語学校	1983年2月

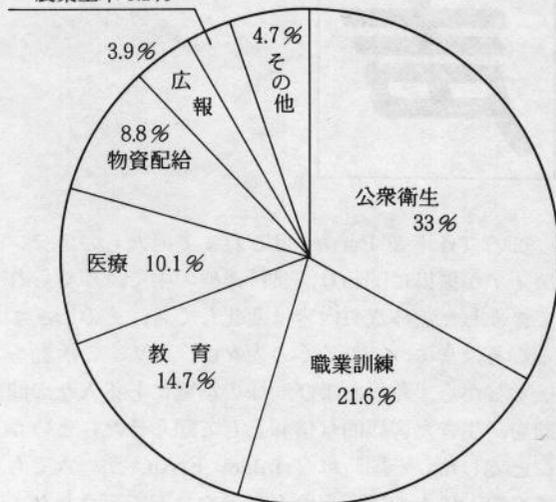
② 1982年度終了プロジェクト

地 域	内 容	終了日
バナニコム	教育レクリエーション	1982年12月
ウボン	日本語学校	1982年6月
"	織物学校	1982年12月
"	自動車整備学校	1982年12月
"	石けん学校	1982年12月
タイ・カンボジア 国境	教育物資配給	1982年12月

グラフⅠ プロジェクト別事業費支出比



農業土木 3.2%



グラフⅡ 種目別事業費支出比

表Ⅰ 1982年度収支計算

支 出		収 入	
科 目	金額(円)	科 目	金額(円)
事業費	65,360,619	寄付金	83,053,232
管理費	24,830,736	雑 収	7,092,977
特別会計へ繰入	109,974	機 関 誌 頒 布	2,941,904
次期繰越	85,044,704	その他の頒布	25,340
		固定資産評価修正	6,064,300
		前期繰越	76,168,280
合計	175,346,033	合計	175,346,033

表Ⅱ 1983年度予算額

プロジェクト名	金額(円)
自動車整備学校 (カオイダン)	16,969,060
X線移動診療 (タイ・カンボジア国境)	21,320,000
補助食供給 (ナムユン)	17,555,565
日本語学校 (バナニコム)	5,076,000
クロントイ・スラム (バンコク)	12,461,350
給水 (タイ農村地域)	32,905,120
御所日本語学校 (奈良県)	4,344,380
農業による自立促進 (ソマリア)	62,740,700
医療ボランティア派遣 (レバノン)	7,296,380

合計 180,668,555 円

● 1983年度予算

タイ国内ではインドシナ難民問題が一応の解決に向っている状況のもとで、1982年度の活動の比重は難民救援から地域開発援助へと移行しつつありました。今年度は更にこの方向へ進める一方で、タイ国以外の地域、例えば、アフリカ(ソマリア)や中東(レバノン)での難民救援活動も始める予定です。

今年度予算は約2億3,600万円です。そのうち、事業予算は約1億8,000万円、管理費予算は約3,800万円、緊急事態に備えての予備費として約1,800万円を計上しました。

尚、各プロジェクトごとの事業予算は表Ⅱをご覧ください。

声

この Trial & Error はこれまで何人ものボランティアが編集に関わり、試行錯誤の中で、つくられてきました。体裁や内容は変化しても、そのめざすところは常に、より多くの人々に、JVCの活動を伝えながら、難民および同様の窮境にある人々の問題を、生きた客観的な情報として知らせたいということでした。と同時に Trial & Error が一人でも多くの人にとって、それぞれのやり方でこうしたボランティア活動に参加していく上でのきっかけなり、ヒントとなることを願っています。

本来こうしたメディア(媒体)は、海外国内を問わず活動に関わる人々の間から、湧き起こり、みんなの共同作業によって形づくられ、共有されるべきものです。けれども現在のところは、不本意ながら一方通行にとどまっています。

そこで、このコーナーを読者のみなさんと私たちのコミュニケーションの場として新しく始めることにしました。また読者相互のコミュニケーションのとり次ぎ役となれたらとも思います。Trial & Error

の感想、JVCの活動に関するご質問やご意見をお寄せ下さい。また活動に参加した経験を通して感じたことや、近況などをぜひ聞かせて下さい。

現場からの報告書では語られないボランティアのホンネの部分や、みなさまからの声を大切に、運動としてのJVCのあり方を問い直し、新たな活力としていきたいと考えています。

水面に投げられた一石が波紋を拡げていくようにインドシナ難民の危機が日本社会に投げた一石によって生まれたこの活動、みなさまの協力と参加を得て日本国内に運動の輪が広がってゆくことを希望しています。

みなさまからのお便りをお待ちしています。

このコーナーへのお問い合わせは!!

編集室 JVC京都連絡事務所

〒602 京都市上京区寺町今出川角
光月堂2階

TEL 075(256)1382

寄附・寄贈して下さった方々の御氏名を掲載させていただきます。(敬称略、順不同)

★東京事務所('83.1.1~)

(1月) 森原国男, 古西チヨ, 斉藤誠, 山口寿則・夏子, 鬼熊芳江, 長富孝光, 国府千嘉子, 山浦誠, 森和子, 稲垣三千穂, 山中高, 赤羽バザー, 菅原光中, 岡田弓子, 上岡作太郎, 七戸朱美, 真壁静夫, 鈴木明男, 田中美智子, 百村清, 山辺中学校2年4組, 渋谷バザー, 中村義邦

(2月) 武沢保美, 野中節子, 広沢衆子, 野中公達, 水迫道子, 稲垣三千穂, 山口寿則, 小熊利弘, 高橋欽治, 小沢靖子, 坂路和恵, 松田勝行, 中村義邦, 上岡作太郎, 渡辺八重子, 佐藤朱美, 小川裕, 日本国際青年クラブ, 広瀬卓蔵, ニューモラルヨコハマユースピアンズ

(3月) 稲垣三千穂, 長谷川秀夫, 七尾ボランテ

ィアビューロー, 田中美智子, 金子初子, 上岡作太郎, 鈴木強, 井崎正子, 山口寿則, 小山南 ロータークラブ, 山本正一, 綾瀬教三, 木村真人, 山辺中学校ボランティア委員会, 袴田善行, 本橋貞子, 田中美智子, 堀みえ子, 田中四郎, 深川信子, 久保田晶子, 盛合富子, 川口恵美子, 深沢新明, 厚木ニューモラル友の会, 吉間雄二, 奥村圓治, 船橋市庁舎建設準備室, 中野本郷小学校, 辻靖彦, ガクムラヨウコ, ナガイマキコ, 加藤千代子, フクハラ

★京都連絡事務所(4.1~6.30)

鶴飼卓, 潮格, 大園孝一, 大西千代子, 大脇宗夫, 小川保博, 角谷秀樹, 京都新聞社社会福祉事業団, 金子順子, 喫茶ヒロ, 佐久間信一, 谷本英雄, 日本青年会議所大阪ブロック-国際問題委員会, 中尾原, 原田誠二郎, 三浦基明, 吉田新一郎

ご協力ありがとうございました。

「パナニコムキャンプを訪れて」

磯村美智子

今回は、現場からのボランティアの声をお届けします。磯村さんは、JVC設立当初よりご協力下さった在泰の日本人主婦ボランティアです。2年半余りバンコクオフィスの会計のお手伝いをして下さいました。現在は日本に帰国されています。ここでご紹介するのは、帰国数日前のパナニコム（第三国定住待ちの人々の一時収容施設）訪問の感想、そしてJVCへ参加された感想です。長い間、ありがとうございました。

私がパナニコムキャンプを訪れたのは今回で二度目です。初回の訪問は、当時、同キャンプでレクリエーションを担当しておられた鈴木さんを中心として難民とフォークダンスを共に楽しむ事でした。

今回は谷沢さんと佐久間さんの指導で主として日本定住を希望して日本語を学んでいる生徒たちと、私達主婦ボランティアや同行した若いボランティアの方たちが、日本語による会話で勉強の進歩ぶりを見せていただいたり、親睦を図るものでした。

バンコクより片道約2時間の道のりを清水ボランティアの運転する車で行きました。車中JVCバンコクオフィスの深津さんから、生徒達の日頃の勉強ぶりや生活状況の説明を受けつつ、タイの国花であるゴールデンシャワーの花や、真赤な花が印象的な大炎樹を眺めながら、乾季の道路を一路パナニコムへと向かいました。

私達一行がキャンプへ到着した時、ちょうどその日の授業が始まっていて、日本語学習の様子を参観することができました。

2クラス共、クメール人が多数を占めていて、年齢は20歳位と思われる人達でしたが、どの生徒もこれから更に試練の荒波を乗り切ろうとしてか真剣な面差しで授業を受けていたのが心に深く印象づけられました。

授業終了後、できるだけ多くの生徒と話ができるようにみんなで輪になって椅子に腰掛け、主婦達が持参したお茶菓子をつまみながら、谷沢さんの挨拶や各自の自己紹介に始まり、日本語によるフリートーキングを行ないました。長年の歴史的、文化的背景による国民性の違いでしょうか、中国系の生徒は積極的に、クメール系はやや控えめでした。しかしながら、説明によると学習を始めてわずか3~6ヶ月しか経っていないにもかかわらず、殆どの生徒が難解と思われる日本語を理解し、上手に話せるよ

うになっているのには驚きました。

灼熱の辺境で、人類愛に燃え、汗を流しながら黙々とフィールドワークを実行されている若い青年男女の皆さん、及ばずながら助太刀をと張切っていらっしゃる主婦ボランティア。この素晴らしい仲間私のような無力な者を、ほんの2年半足らず参加させて頂き、お陰様でバンコクの生活がより充実したものとりました事を感謝しています。

私は6月末に日本へ帰国が決まり、バンコクでのお手伝いができなくなりましたが、どうか、今後共皆さんで力を合わせ、よりよいJVCに育て上げて頂きたく、御活躍を心からお祈り申し上げます。

最後に、熱帯での厳しい気象条件を充分留意されお体御自愛下さいますように、そして、一日でも早く不幸な難民問題が解決される事を心から願っております。

1983年6月25日



JVCプロジェクト

1983年7月19日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カオイダン (カンボジア難民 キャンプ)	自動車整備学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、発電機の 整備技術を習得する。各3ヶ月、学生数約120名、	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協 議会	嶋 紀晶※、清水 洋子 松本 一仁、下平 良男 トンディ、ソムエック
タイ・カンボジア 国 境	レントゲン移動診療プロジェクト 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災 村の病院への巡回レントゲン診療。	日本青年会議所 関東地区、医療 部会 西本願寺 W.F.P./UNBRO	金子 一弘※、米田 省三 武田 長久、スラ、 プロチョン
	ナムコン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の妊産婦、乳幼児を対象とした補助食供給	W.F.P./UNBRO	大野 直樹※、チャイサクク ジュタワン、イサラサク トニチャック、プライサモン 近藤美佐子
タイ 農村	給水プロジェクト 東北タイ農村での井戸掘り、貯水タンクづくり	モラロジー国際 救援運動推進委 (MIRC)	木村 信夫※、スラポン 諸見里 勝
タ ケ オ (カンボジア国内)	井戸掘り 地域の診療所での井戸掘り	OXFAM モラロジー-MIRC	簗田 健一
バナニコム (第三国定住待ちの 難民の一時収容施設)	日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエ ンテーション	天理教千葉 千 葉 県	佐藤 和美※、ティアン 佐久間正一、黒木 啓子 清水 宏、石丸 寧
クロントイ・スラム (バンコク市内の スラム)	電気工養成所 スラム住民のための職業訓練 電気工研修所 養成所終了者による電気修理 奨学金援助 スラム児童のための学費援助 図 書 館 子供たち、大人のための図書館	モラロジー-MIRC 神奈川県国際交 流協会 一般寄付	福村 州馬、釘村千夜子 イム、サムルアイ アルニー
御 所 (奈良 県)	日本語学校 一時滞在ベトナム難民の日本定住援助	UNHCR カリタス・ジャパン	平賀 増美※、伊藤千鶴子 大貫 玲子
ソ マ リ ア (東アフリカ)	農業プロジェクト(準備中) マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソ マリア難民に対する農業による自立促進プロジェ クト。	U N H C R 一 般 寄 付	柴田 久史
レ バ ノ ン (中 近 東)	医療ボランティア派遣プロジェクト(準備中) ベイルートおよび南部レバノンでの、被災民(レバ ノン人とパレスチナ人)に対する医療活動の援助。	一 般 寄 付	竹内 俊之
活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京事務所 (本 部)	渉外、資金調達、ボランティア調整、 会計、総務、情報収集および広報、T/E発行	全 社 協 Y M C A 妙 心 寺 一 般 寄 付	星野 昌子(代表)、 熊岡 路矢(事務局長)、 田島 誠、荻野美智子、 本橋 栄、鶴田 三芳 他約20名
バンコク事務所	渉外、資金調達、ボランティア調整、 会計、総務、情報収集および広報		高塚政生(バンコク事務局長) 深津 高子、武田 恵治 ポンピモン、カモン 森本喜久男、伊藤真理子 エディサ、小池 清治 他約10名
京都連絡事務所	渉外、ボランティア調整、募金、会計、 情報収集及び広報	支 持 会 費 バ ヶ ー 売 上	永井 聖子(京都事務局長) 他約7名

JVCの活動は、みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにすため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

- **インドシナ難民救援募金** (6月小計 242,463円)
東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。
- **ボランティア募金** (6月小計 3,000円)
現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。
- **クロントイ・スラム募金** (6月小計 6,918円)
バンコク、クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。
- **デッグ・スラム奨学金** (スラム児童奨学金)
バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助、一口いくらでも可。(6月小計 66,000円)
- **JVC運営経費募金** (6月小計 44,000円)
事務経費、人件費、通信費等、JVCの仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。
- **アフリカ難民救援募金** (6月小計 3,000円)

- **レバノン難民救援募金** (6月小計 2,000円)
南部レバノンの難民キャンプに7月より、医師、看護婦、検査技師、身障者のための療法士などを派遣活動資金を募っています。
- **日本語家庭教師募金** (6月小計 1,000円)
定住難民の家庭は遠い所が多く、交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。
- **医療募金** (6月小計 22,000円)
緊急医療活動のための資金となります。
郵便口座：東京7-96238
加入者名：JVC東京事務所医療募金係

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京9-27495

加入者名：JVC東京事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

JVCより

● 人種対立による暴動の起きたスリランカに留学中のJVCのOG三橋玲子さんから8月12日電話連絡が入った。7,900人(政府発表)が家や店を焼かれ、避難民となった。コロンボのキャンプではUNICEF、WFP等が活動しているが、水や薬、衣類等が不足。北部のジャフナの状況がひどいらしい。ただ国内問題であるため外国人が救援に入ることは難しい模様。JVCはスリランカ赤十字に送る義援金を募っている。

速報・レバノンへ、医師・看護婦の出発決定

各勢力が入り乱れて対立を続けるレバノンでは、武力行使のために死傷者も多く通常の医療活動も困難な状況にある。レバノンへの医療スタッフ派遣プロジェクトの準備を進めてきたコーディネーターの竹内は8月11日ベイルートに入り、17日には受け入れOKのテレックスを打ってきた。看護婦の泉敦子さんは1年の予定で30日に出発。プロジェクトの資金難から彼女は旅費、当面の生活費を自費でまかなうことを申し出てきている。〈レバノン募金〉へご支援を！

編集後記

● 医療や保健衛生の仕事は、国境を越え、言葉やイデオロギーを越えて、それを必要とする人々に直接手を差し伸べることができる。

先進国では誰にでも高度な医療の恩恵を受ける機会がある。しかし今この時「ひと粒の薬がないために」命を落とす人々がいる。そんな人々の力になりたいという泉さんは、間もなくレバノンへたつ。

また、JVCに関わってきた若いボランティアの中で、医師、看護婦、栄養士・公衆衛生の専門家などをめざして、自力で勉強を始める人たちが後を断たない。彼らの決意に心からの敬意と声援を送りたい。

そして、医師や看護婦が海外の現場で働くことを可能にするために、それを支えるたゆまぬ地道な努力が不可欠であることを確認しておきたい。

—— ファインダー ——

裏表紙撮影

野中章弘

パキスタン領内のアフガニスタン難民キャンプにて

JVCとは

Japanese Volunteer Center は1980年2月、タイの首都バンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず、カンボジア国内での井戸掘りを実施している他、日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所と京都連絡事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。



発行所 JVC東京事務所
〒166 東京都杉並区阿佐谷南
1-1-5 三笠ビル3F
最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03(316)3253

バンコク事務所 Japanese Volunteer Center
67 South Sathorn Road
Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

京都連絡事務所 〒602 京都市上京区寺町今出川角
光月堂2F TEL075(256)1382
(〈海外ボランティア情報センター内〉)

昭和58年8月20日発行
毎月20日発行

発行人 星野 昌子
編集人 本橋 栄
森山久寿子

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円 (1冊送付)

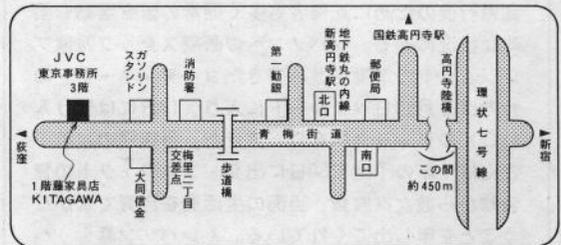
賛助購読者 1口 10,000円 (4冊送付)

郵便口座番号 東京3-54186

加入者名 JVC東京事務所

住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。

Trial & Error は、季刊(年4回)の特集号と、年8回のニュースレターをお届けすることになりました。年間購読料は従来通りです。



定価 送料共 200円